

ヒトとつながるカヤツリグサ科植物  
—積雪地帯で栽培されたカンエンガヤツリ—

(公財) 日本植物調節剤研究協会  
技術顧問

森田 弘彦

カヤツリグサ科植物はイネ科植物とともに単子葉類を代表する群で、防除の困難な特性を持つ水田雑草の種を多く含む一方、古くから知られた有用植物もいくつか有している。

カンエンガヤツリ *C. exaltatus* Retz. var. *iwasakii* (Makino) T. Koyama は、高さ 120cm ほどの稈を伸ばすスマートな一年生のカヤツリグサ属植物である (図-1)。日本においては、本草学や園芸に通じた江戸時代後期の武士岩崎灌園 (常正: 1786 ~ 1842) が、その大著「本草図譜」の「芳草部」に初めて図示し、「一種 水莎草 (中略) 水生のかやつりくさなり 苗葉三稜に似て陸生より長大なり 高さ三四尺 武州不忍池に多し」と記述した (図-2)。江戸時代が終わって 1892 年に牧野富太郎先生がこの植物を新種として発表し、岩崎氏の姓を学名の種小名に、名を和名に献名した (植物学雑誌 1903)。この植物はその後小山鐵夫先生によって、東南アジアなどに広く分布する多年生の *C. exaltatus* の変種に位置付けられた。

東京都台東区上野公園の不忍池はカンエンガヤツリの発生地として知られてきたが、今では下町風俗資料館の横の空き地にわずかに見られるに過ぎず (図-1)、これはどなたかが栽植されたものかもしれない。一方で、不忍池の縁などには最近、帰化種とされるホソミキンガヤツリ *C. engelmannii* Steud. が目立つが (図-3)、こちらは茨城県、千葉県を含む関東地方から西の水田畦畔などで増加傾向にある。カンエンガヤツリの日本国内での分布は限られていて、2017 年の環境省レッドリストではカヤツリグサ属植物として唯一の絶滅

危惧II類 (VU: 絶滅の危険が増大している種) に含まれた。関東地方の河川・池沼や湿地に時折発生し、茨城県南部にある植調研究所の龍ヶ崎水田圃場の畦に出たこともある。

牧野先生のカンエンガヤツリの記載文の末尾には、朝鮮半島では敷物に編むための稈を目的にこの植物を栽培することが、小石川植物園の内山氏からの話として記録された (植物学雑誌 1903)。

It is abundantly cultivated in boggy field as a useful plant in Corea, where a sort of floor mat is made of its culms, ... (以下略) その後、朝鮮半島での栽培や利用の様子も伝えられた (村



図-2 「本草図譜(岩崎灌園)」所収で「カンエンガヤツリ」と命名された「水莎草」の模写図

左: 木邨徳太郎模写? (国立国会図書館デジタルコレクション)、右: 岡田清福模写 (博文館 1903)



図-1 大型のカヤツリグサ属植物、カンエンガヤツリ (2016年9月、上野不忍池にて、スケール: B・18mm, C・5mm, D・0.7mm)



図-3 近年増加傾向のカヤツリグサ属の帰化植物、ホソミキンガヤツリ (2016年9月、A: 上野不忍池, B, C: 龍ヶ崎市、スケール: B・12mm, C・1.6mm)



図-4 「莞草栽培法試験成績，秋田縣農事試験場，1931？」の表紙の部分（秋田県農業試験場蔵）



図-5 「莞草（ワングル）の加工」：秋田縣農事試験場曉鐘會発行の絵葉書（戦前？）



図-6 カヤツリグサ科有用植物の代表，カミガヤツリ（上：エジプト，栽植，1988年）とパピルス製の土産品（下）

田懋磨 土名對照鮮滿植物字彙 1932)。

「莞草：Koan-tcho, Oang-kol-(phul)【왕골】・・南朝鮮の水澤地に生ず。京畿の江華，全南の寶城，慶北の金泉，軍威等はその名産地にして，専ら筵席を製するに用ゐらる。内地の間には一般に江華筵として知らる。無地織，雲鶴模様，その他福，壽，囀等の文字を織り出せるものあり。」

1933年に農林省の出先として山形県新庄市に設置された積雪地方農村經濟調査所が，秋田，宮城，山形各県の状況を調べて1940年に刊行した「莞草栽培に関する調査（報告第三六號）」によると，カンエンガヤツリは，水田の苗代の活用と冬期間の余剰労働力の利用を目的に日本の北部への導入が推奨されたようだ。

「・・之等地方に於ける農業經營の改善は基より一に止まらないが冬季余剰労働力の利用消化並土地の利用増進等は重要改善事項たるを失はない。本所は右の目的に適合した一つの作物として莞草の栽培及之が加工に着目し，其の第一着手として之が技術的栽培試験を施行するに至った次第である。」

秋田縣立農事試験場では上記調査所の設置に先んじて，1929（昭和4）年から莞草，カンエンガヤツリの試験に取り組み，3年間の試験研究に基づいて，1931年（？）に「莞草栽培法試験成績」（図-4）を刊行した。

「昭和四年以来種子の配布，其の他の方法に據つて之が栽培の奨励を行った所，現在では相當収益を収めつゝある地方もあるが，然し全縣的に觀る時は未だ普及の餘地多く，今後益々増産に力を入れ特産として発展せしめる必要がある。」

同農事試験場の曉鐘會が作成した絵葉書に用いられ（図-5），また，「秋田縣青年學校 農業教科書 卷一 第一二 纖維作物（秋田縣教育會編纂 1942）」の下記の記事があることから，当時は一定の栽培と加工があったことが偲ばれる。

「本縣に於ける纖維作物としては右の外，蘭・莞草等がある。（中略）莞草は近年朝鮮から輸入して東北地方の冬季の副業として奨励され，縣内各所に栽培されて加工品も市場に現れてゐる。」

筆者は，1989年に韓国を訪問した折に民俗村で展示栽培のものを見たことがある。現在，秋田県の植物目録などにカンエンガヤツリの名を見ることがないので，秋田県では栽培の場から逸出して野生化することはなかったようだ。

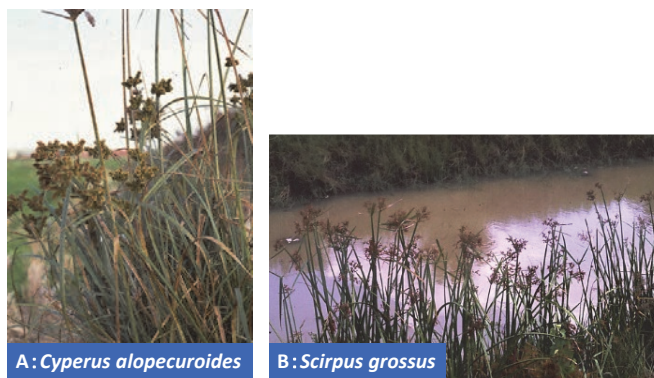


図-7 稈を利用するカヤツリグサ科植物  
A: *Cyperus alopecuroides* エジプト，ナイルデルタ，1988年，B: *Scirpus grossus* タイ，中央平原，1982年

稈を利用するカヤツリグサ科植物としては，カミガヤツリ（パピルス *C. papyrus* L. 図-6）が世界で最も有名であるが，日本ではシチトウイ（七島蘭 *C. monophyllus* Vahl.）が大分県国東地方の特産品として水田で栽培され，それで織られた畳表は丈夫で柔道場などで用いられる。大分県農業技術センター杵築試験地で作物として栽培・加工技術と品種改良が取り組まれてきた。エジプトのナイル・デルタでは，草丈150cmほどになる多年生の *C. alopecuroides* Rottb.（図-7）を，「所によって，農地の境界が不明瞭な場合に栽培し，また，ファイユーム（オアシス都市）の限られた場所で栽培して敷物や椅子」に作る。という（Boulos & el-Hadidi THE WEED FLORA OF EGYPT 1989）。東南アジアではオオサンカクイ（*Scirpus grossus* L.f.）も使われる（図-7）。

カンエンガヤツリをはじめ，真つすぐに伸びて節のないカヤツリグサ科植物の稈は結構人々に利用されてきた。一方，稈の両端を二人で互い違いに裂いて四角に開く遊びに使い，「カヤツリグサ」の名を遺した，かつての日本の子どもたちも大口の利用者であった。

（秋田県農業試験場作物部の三浦恒子氏と三浦一将氏（現：北秋田地域振興局）には所蔵資料の閲覧にご高配を賜りました。御礼申し上げます。）